対象作品／いとうみく作『あっちもこっちもこの世はもれなく』ＰＨＰ研究所

不公平は公平だ

弘前市立福村小学校　石岡実結

この本は私のことが書いてあると思った。私はせが低くて目が悪い。四年になっても、低学年にまちがわれる。小学二年生の時に、目の手じゅつをした。ゲームもやらないし、テレビも見ない。外でも遊ぶし、目に良いと言われる事はやってみた。それなのに手じゅつをしてメガネをかけることになって、くやしい思いをした。

主人公は、せが低いのがいやで、一日牛乳一リットルを目標にして飲んでいる。ぎゃくに主人公の親友は、けい馬のき手になりたいのにどんどんせが高くなっていくのがなやみだ。主人公は親友から給食の牛乳をもらって飲んでいる。牛乳を飲んでいるのにチビだと友人にからかわれ、それをかばったちがう友人の言葉のほうが、「くやしくて、はずかしくてぼくにはきつかった。」と思っている。「せが低いぼくはかわいそうなのか？せが低いってざんねんな事なのか？チビだって言われたらきずつくのか？」こんな事で泣くなんてぜったいいやだ。みじめすぎる。と思っているのに、目が悪い友人のことは、「メガネをかければ遠くだってバッチリ見えるようになるじゃん」「だけどせは高くなれない」と、し力とせでは不公平さのレベルがちがうと考えている。

この考えだと私はせが低いし、目も悪いので、とてもざんねんでかわいそうな子なのかと心の中がモヤモヤした。私も学校で主人公のように、低学年にまちがえられて「公太君はつとむ君より小さいけど、大きい子なんだよ」みたいな事を言われる。主人公は「正ぎをふりかざしたまっとうな言葉のほうがぼくはきずついた。」と思っている。

せが低いのも目が悪いのも悪い事じゃないのに、言われると心の中がチクチクしてくるのはなぜか考えてみた。小さいころは、せが低くても、目が悪くても仲よしで遊んでいた友だちも、何かちがうなと感じる事がある。良いなと思う事も、いやだなと思うこともふえた。せが低いから、目が悪いからとからかわれる事はないけれど、私にとってはコンプレックスだ。

この物語には、せが低くてなやんでいる人、せが高くて気にしている人、目が悪い人、色んなコンプレックスを持った人が出てくる。「不公平さは、だれにでも公平にある」と物語の中のおじさんが言った。そうか、なるほど。と思った。

　コンプレックスは、他の人から見たら気にならないかもしれない。他の人のコンプレックスを私は長所と思っているかもしれない。私はせが低い人の気持ちも、目が悪い人の気持ちもわかる。不公平だと思う事はかんたんだけれど、見かたを変えれば、全部がめぐまれているよりも、小さな幸せとよろこびを見つけられる力になる。心を大きく広げてみよう。不公平は不幸ではないと気づいて、私の心は晴ればれと軽くなった。